

須弥山の構造について II

春日井真英

「須弥山」研究に用いている各資料を、そのモチーフにしたがつて七・八群に分類し得ることはすでに述べた。今回はそのモチーフ群を、「山」を中心に再構成し、各資料の「閻浮提品」を異つた一面から考察しようとするものである。

各資料の「閻浮提品」は一つの纏つたものという理解を有していたが、モチーフごとの分類、再構成の結果、これは三つの異なつた中心の思想を並記していると考えられる。つまり、

- (A) 第I・IIモチーフの「須弥山」・「九山八海」グループ
- (B) 第V・VIモチーフの「須桓那山」・「冬王山」グループ
- (C) 第VIIモチーフの「乾陀摩訶衍山」グループ

である。しかも表現形式から考えると各グループとも独立した関係にあることが考えられる。各グループの特徴は、(A)がそれ自体一つの確固とした纏りを示しているのに対し、(B)・(C)にはそれほど纏りはない。殊に(B)は他と比べるとまとまりを欠き、その上仏教的色彩が強いことが指摘できる。(B)・(C)グループは記述面に共通項を有している。それはグループ(A)が、最初に中心の「須弥山」から記述し、それから順次外延へむかつているのに対し、こちらは求心的構造ともいふべき、外延から中心領域へむかつて叙述されている。さらに(A)では具体的な数字が示され、記述表現は三次元的レベルでの

理解を可能にしている。しかし(B)・(C)においては具体的な数字は存在せず、かつ中心領域へは単に方向を示すという二次元的な記述形態をとっている。

先にグループ(B)が他にくらべてまとまりを欠くと指摘したが、そのことを明らかにするためグループ(C)の説明からはじめていく。グループ(C)は(B)グループの「冬王山」の南にある維耶離国、その北の「七黒山」、「和曇摩山」の北にある「乾陀摩訶衍山」を中心に設定している。しかしその前に、この「冬王山」の南にして、その北にある「乾陀摩訶衍山」という表現を同題にしなくてはならない。それはこの表現が論理的帰結として同じものを示しているからである。この種の表現にもかわらず、この二山の性格的特徴は全く異質である。殊に「冬王山」には他では見ることでできない「……甚高過億」という形容詞句がつく他、阿那達摩、阿耨龍王という仏教的色彩の濃い問題と関連していることは注目する価値がある。そしてこの「冬王山」の南にして、その北……というロジックはこの部分が後世挿入されたことを暗示していると考えられる。

「乾陀摩訶衍山」を中心とするグループ(C)には、先に述べたような仏教的色彩は見出せない。だが、この山がはたして本当の意味で中心であるのか否かは不明である。それは山がここでは単に「畫」・「善畫」(これが何を意味し、どのような象徴的機能を有しているかは不明)の住いとして二つの洞窟を提供しているにすぎないからである。この「畫」・「善畫」の洞窟の北に「善住」という樹王がとりまいているという。さらに、この「善住樹王」の下に「善住象王」がいて、これを八千の象王がとりまいている。この樹と象という二重構造の構成は、樹王の北にある「摩那摩池」という浴池の存

在により不完全ながらも、天―地―水という象徴的構造を顕現させているといえよう。ここでは山そのものよりも、樹・象・池の方に重きがおかれていることに注目する必要がある。

先に述べたようにグループ(B)は「冬王山」を後世の挿入と考え、ここに改めて、

(B) 第Ⅴモチーフの「須桓那山」グループ

(B') 第Ⅵモチーフの「冬王山」グループ

に再構成しておく。これは右の理由の他に、「須桓那山」に見出される八万窟と、その中にいる八万頭の象のためである。つまり(C)グループの「善住象王」と同じ範疇に入るのではないかと考えるからである。この象の特徴は七日に一食する他、六本の上に広く、下に狭い牙をもつ。そしてその歯牙の間には金が填つていとされている。「須桓那山」のこの象と(C)グループの象王の特徴は各資料により微妙な差異はあるものの、その中心的事柄は一致している。『大樓炭経』においてこの山は「須桓那」、「須那鉢山」と音写されているが他資料では「金壁山」「金脇山」と意識されている。このことから考えてこれを金の山と理解することができる。しかも「須弥山」の北面が金よりなつていという記述と考え合わせると、この山は「須弥山」的性格を内に秘めていると言える。

グループ(A)では「須弥山」を中心に置く「丸山八海説」が山と海により同心円的構造を示すのに対し、(B)では樹々のバリヤー、花の池、毒蛇の池、鬱单茄山から成り立つていることしか分らない。これはグループ(C)の場合にも該当する。(C)は「七黒山」「和曇摩山」の山から成り、池などによって示される「水」の要素は外延には存在しない。しかも記述は直線的な二次元の世界に限定されている。

須弥山の構造について Ⅱ(春日井)

これは、その世界を三次元的に表現しないことでその広大さを直接的に伝えようとしていることが考えられる。それは次の樹王・象王が三次元的に把握されていることから理解しうる。

以上のように各資料のモチーフは三つのグループより成立している。また(B)はその仏教的要因を考慮し、(B)と(B')の二つに分けた方が正しいと考えられる。各中心の「山」の特徴を比較すると、(A)は「須弥山」そのものに重点をおいているのに対し、(B)では「須桓那山」の八万窟の八万の象に。そして(C)では「山」よりもむしろ八千の樹王と八千の象王、それに「摩那摩池」の方に重点がおかれているといえよう。このように中心にある山よりも、それに附随している象徴的存在の方に重点がおかれていることは、宇宙軸、宇宙山としての機能よりも世界の中心である聖なる領域としての機能の方に重きが置かれていたと考えられる。

- 1 印度学仏教学研究・第二八巻第二号一四〇頁。
- 2 宗教研究・第五三巻 第三輯 六八頁。
- 3 「九山八海」説は『大樓炭経』には欠。
- 4 この山の名称等は『大樓炭経』による。
- 5 第Ⅵモチーフの象王は他の資料によると総て飛行可能な神的存在とされている。
- 6 『長阿含経』では「金壁山」、『起世経』『起世因本経』では「金脇山」。
- 7 樹の種類は各資料により数が異なる。

(愛知学院大学図書館員)